



Keith EASLEY,
*Dickens and Bakhtin: Authoring and Dialogism
in Dickens's Novels, 1849-1861*
(xxii+215 頁, New York: AMS,
2013 年, 本体価格 \$92.00)
ISBN: 978044644789

(評) 矢次 綾
Aya YATSUGI

上掲書はタイトルの示す通り、バフチンの思想と比較検討することを通して、ディケンズの小説を吟味するものである。第1章 (David Copperfield's Self-Consummation), 第2章 (Self-Possession in *Great Expectations*), 第3章 (Dialogism: Definitions and Contexts), 第4章 (Authoring and Dialogism in *Bleak House*), 第5章 (*Hard Times: Art and Reality*), 第6章 (*Little Dorrit: From Authoring to Dialogism*), 第7章 (*Little Dorrit: Re-creation*) の7つの章から構成されている。キーワードとして、サブタイトルにある「書く」こと (authoring) と対話性 (dialogism) の他に、自己「完結」(self-consummation) が挙げられる。自己「完結」とは、デイヴィッド・コパフィールドに典型的に見られるように、語ることを通して、意図していた自分の物語を「完結」させることだと言える。

著者のキース・イーズリーは、バフチンとディケンズに共通して見られる認識として、あらゆる人間活動は価値の表現に重点を置いていること、個人の境界はその個人が自分の行動として責任を持つとする範囲によって定められること、個人の性質 (individuality) は「書く」ことを通して、著者 (author) と人物、もしくは著者と主人公 (hero) が相互に作用し合うことによって表出することを最終的に挙げている。それに至る過程で、イーズリーは、愛、道徳、人格がヴィクトリア朝においてどのように考えられていたのかについて再評価しているのに加えて、バフチンの著書を網羅的に取り上げ、バフチンの思想や理論の再評価も行っている。ディケンズとバフチンはしばしば関連づけて論じられるが、バフチンの再評価を入念に行っている点が、上掲書の特徴の一つだと言えよう。ただし、上掲書のバフチン研究書としての側面を吟味したり、その位置付けについて述べたりする力量が評者には欠けているため、この書評においては、以下、ディケンズの研究書としての側面に焦点を当てさせていただいている。また、各章の内容を公平な視点から要約するというよりも、評者が特に興味深く思った点を中心に述

べさせていただいている。以上の点をあらかじめお断りしておきたい。

第1章では、『デイヴィッド・コパフィールド』(以下、DCと略記)における自己「完結」に関する諸問題が分析され、それを踏まえて第2章では、DCとの比較において『大なる遺産』(以下、GEと略記)が論じられている。この二作に限らず、ディケンズ小説では、それぞれに独立した複数の声が自己や他者について絶え間なく「書き」、評価し、定義しながら、せめぎ合っており、そのせめぎ合いを通して人物の性質が表出し、全体として一つの小説を形成していることを、上掲書を通して再認識することができる。DCの特徴と言えるのは、語り手のデイヴィッドが、アグネスを妻とするリスペクタブルな小説家として「書いて」いる自分を主人公(hero)として「完結」させるために、自分自身や他者について主観的に「書いて」いる点が目立つという点である。

DCにおける以上の特徴を立証する一環として、イーズリーは、リトル・エミリーについて「書く」デイヴィッドを始めとする人物たちの声を吟味する。それと同時に、ヴィクトリア朝における中産階級のリスペクタビリティの模範を示す書であり、性に関わる禁を破る者と接する際のマニュアル本としてのDCの側面に着目している。すなわち、エミリーがハムの妻としての未来に満足することができず、ステアフォースと出奔するのは、自分のセクシュアリティを満足させるだけではなく、リスペクタブルな人物と結ばれることによって、リスペクタブルな世界の一員になりたいという幼い頃からの野望も満足させるためであるが、アグネスを妻として道徳的な家庭を築く小説家デイヴィッドは、彼自身が属するリスペクタブルな世界の安定性を保持するために、エミリーの行動を許容するわけにはいかない。そのようなデイヴィッドの姿勢が顕著に見られる一例として、彼がローザ・ダートルによって罵倒されるエミリーを自分で助けようとはせず、観察者に徹して、ミスタ・ペゴティーが現れるのを待ち続けることが挙げられる。このように「書いて」いるデイヴィッドと「書かれて」いるデイヴィッドの密接な関係性を読者は絶えず意識させられると、イーズリーは指摘する。それに加えて彼は、デイヴィッド以外の人物たちも、エミリーが性的に成熟するに伴い、彼女の存在の危険性を仄めかすかのように、まるで彼女が人形であるかのように接していることにも注意を払っている。さらには、エミリーを救出してオーストラリアへ同行するのが、父親の役割を果たすミスタ・ペゴティーである理由として、イーズリーは、エミリーの救出劇を性的な意味合いを持たない、純粋なものにする必要があるためだと指摘している。

以上のように、デイヴィッドがリスペクタブルな自分を「完結」させ、そのような自分を主人公とする小説を成立させるように、ピップは、ミス・ハヴィシャムという名付け親の妖精によってエステラを授けられるお伽話を「書く」ことを

通して、主人公としての自分自身を「完結」させようと意図していたと考えられる。ところが、マグウィッチ（イーズリーは、その名前が魔女‘Mag’-“witch”としての彼の本質を示唆していることに着目する）が彼の「書く」新たなお伽話を提示することによって、ピップは当初意図していた、自分自身を主人公とするお伽話を「完結」することができなくなってしまう。このように、「書き」手のピップと「書かれて」いる対象のピップとの間に距離があり、「書き」手のピップがその意図を「完結」することができない点を、イーズリーは *GE* の特徴として挙げている。

ピップは、ミス・ハヴィシャムを名付け親の妖精とするお伽話を「完結」することができないだけでなく、ミス・ハヴィシャムに出会う以前に準備されていた鍛冶屋の徒弟としての物語を生き直すこともできない。その理由はもちろん、ビディがジョーと結婚し、ピップの自己「完結」の物語に取り込まれることを拒否するために他ならない。この点に加え、イーズリーは、ピップが病を患うのを境として、過去の自分を自己「完結」すべき主体として見ることができなくなっていると指摘する。すなわち、病に陥る以前のピップは一人称の語り手として、自分が他の人物たちによってどのように「書かれ」ていたかを物語っていたが、病を経て自分を他者として認識するようになった。その結果、デイヴィッド・コパフィールドがアグネスを妻とするリスペクタブルな小説家として自己「完結」するために物語を行ったのとは異なり、自分ではなく他人（ビディとジョー）が幸福になる物語を語るようになったとイーズリーは説明している。

イーズリーは、ピップがその人生を通して、自分は他人から許される必要があるという思いに憑りつかれている点、そして、自己「完結」できなくなったピップが、エステラに自分の物語を捧げることを通して、鍛冶屋の徒弟としての人生から自分の足を踏み外させたエステラを自分の身代わりとして許し、未来へ向かわせた点も分析している。換言すれば、自分が「書いた」物語を最終的にエステラに捧げることによって、ピップは、自分をそのような結末へと誘ったのがエステラであり、自分の代わりに許されるエステラこそが彼の「書いた」物語の主人公であることを示唆したという指摘も、イーズリーは行っている。そのようにエステラが自分自身で「書いた」物語ではなく、ピップによって「書かれた」物語の主人公になり得る証拠としてイーズリーが挙げるのは、彼女が主体性をもとから放棄しており、その自我が他人の愛情、欲望、憎悪、無知によって形成されている点、ピップが、エステラは自分の存在や自我の一部であり、読んだ本の一行一行にエステラを見出していたと述べている点（第44章）である。さらにイーズリーは、“*Estella*”という名前の中に“*Tell her*”という、著者が物語を捧げる対象としての彼女の役割が含意されていると指摘している。ピップはエステラに物語

を捧げて、物語の表舞台から去っていくわけだが、著者が最終的に姿を消してしまうことは、著者の本来のあり方だとバフチンが見なしていたことであり、デイヴィッド・コパフィールドが著者としての自分の存在を読者に印象付けることとの違いである。

第3章でイーズリーは、バフチンの言う対話性が互いに独立した語り手と登場人物(たち)の対話であることを確認した上で、この用語の定義を検討する。そうする中でイーズリーは、19世紀の特徴的な問題として、個人の「完結」すべき人生がもともと規定され、個人の性質が対話によって形成され難くなっていることだと分析する。この点にディケンズも危機感を持っていたと述べることから、『荒涼館』(以下、*BH*と略記)に焦点を当てる第4章を始めている。エスタ・サマソンは自我が芽生えた時には既に、伯母のミス・バーバリーやヴィクトリア朝の厳格な道徳観によって「完結」すべき人生を規定され、その後の人生においても、ターキングホーン等によって彼女の実母レディ・デッドロックの人生が「書かれ」るに伴い、彼女自身の意図しない人生を押し付けられそうになる。しかし、エスタは外部の著者ディケンズによって、一人称の語り手として「書く」力と観察眼を付与されており、他者について「書き」、他者と対話することを通して、他人に愛されるという自分の性質を表出させていく。その結果として彼女は、生まれる以前から「完結」すべきものとして規定されていた物語から脱却していくのである。ジャーディスの役割としてイーズリーは、エスタを過去の束縛から解放することはできなくても、彼女が当初位置づけられていた環境から空間的に解放することを挙げている。その一方で、ジャーディスが「ハーバード伯母さん」などの名付け親の妖精の名前でエスタを呼ぶことによって、他人の人生が「完結」するのを助ける役割を彼女に背負わせ、彼女の自己「完結」を妨げた可能性については分析されていないが、名付け親の妖精としての彼女の人生を「書いた」ジャーディスと、他人から愛される契機を模索するエスタが対話を行った結果、彼女は自分自身を解放へと導いたとイーズリーは解釈するであろうと想像される。ピップは病を患うことによって自己「完結」する主体として語ることができなくなったとイーズリーが指摘している点については既に言及したが、エスタについては、アンドリュー・サンダーズの分析を引用しながら、病を経ることによって、生まれる以前から規定されていた人生から脱却するために他の人物と対話する積極性を増したと記している。

エスタは当時の道徳観から私生児としての物語を「完結」するよう強要されていたが、*BH*の人物たちに自分自身の意図とは別の物語を「完結」するよう強要する社会的要因として、法律、警察、制度が挙げられる。それが『ハード・タイムズ』(以下、*HT*と略記)では政治、経済、資本主義、支配的な思想の人々に対

する圧力として描かれているが、*HT*における支配的な思想は「事実」(Fact)によって象徴される。それを弱者に強要する利己的な体系を崩すのが対話性である。『リトル・ドリット』に焦点を当てる第6章および第7章でも、人間性を害う社会の問題に注意が払われるが、強い対話性を導入することによって、エイミー・ドリットとアーサー・クレナムが互いを主人公とする物語を互いに「書き」合っているとイーズリーは指摘する。そのような相互性をこの小説で成立させ得たことによって、ディケンズは*GE*において、自分の物語をエステラに捧げる冷静沈着さ (self-possession) を持ったピップを創造し得たのだと、イーズリーは論じている。

バフチンの研究書としての側面について評価する力量が評者には既にお断りした通りだが、それでも興味深く読ませていただいたことは事実である。イーズリーはヴィクトリア朝における思想的な問題点を、自己「完結」と対話性という観点から分析し、それに対するディケンズの立ち位置を明確にしている。また、ローザ・ダートルに叱責されるエミリーを、デイヴィッドが自分で助けずにミスタ・ペゴティの到着をひたすらに待つ理由は何なのかというような、評者が何となく通り過ぎていた問題を、イーズリーはバフチンと対話しながら解決してくれた。評者自身のバフチンに対する理解を深めてから、上掲書をもう一度読み直したい。その時にまた、イーズリーは新たな発見を評者にさせてくれるに違いない。